



## Osaka Gakuin University Repository

Title	日露戦争期小樽における木材業の動向 Lumbering industry in Otaru during the Russo-Japanese War
Author(s)	松村 隆 (MATSUMURA TAKASHI)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 23 巻第 2 号 : 1-14
Issue Date	2012.12.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

## 日露戦争期小樽における木材業の動向

松 村 隆

### Lumbering industry in Otaru during the Russo-Japanese War

MATSUMURA TAKASHI

#### *ABSTRACT*

The lumbering industry companies in Otaru exported wood and a tie to China and South Korea at the time of the Russo-Japanese War. And the industry was developing. Mitsui and Teshio-Mokuzai Incorporated Company exported them. Wood was conveyed by their own steamship.

When exporting wood, standardization of wood was called for because of the situation of the export destination. Since wages were high compared with the cities treating similar wood, the machine lumber was required in Otaru and it developed there. The craft of lumbering industry was not organized. The industry was governed by a small number of companies.

The lumbering industry companies in Otaru depended on the branch office and the agency for the information on a demand place. They used to get wood, handing payment in advance to local merchants, but later they changed their approach to a new system in which they bought forest for themselves. They were diversifying suppliers from whom they would buy wood and it succeeded in making wood price fluctuation small.

## はじめに

日本の木材業は、日露戦争後の時期に、工業化への対応や輸出の拡大といった大きな変動を経験した<sup>1)</sup>。輸出にかんしていうと、西日本の諸都市や東京では、中国への木材輸出が大きく拡大した<sup>2)</sup>。産地に近い木材集散地であった能代では、中国輸出が開始されつつあった<sup>3)</sup>。同じく北海道という巨大木材産地の木材集散地であった小樽においては、以下にみるように中国輸出を中心とした木材業の展開がみられた。こうした小樽木材業を担った主体や取引の状況はいかなるものであったか。

### 1、小樽における木材輸出入

小樽における木材の外国貿易は、当該期には年々旺盛にむかっていた。輸出額は増加した。北海道には豊富な木材が存することは知られていたが、交通不便等のため十分な利用はなされてこなかった。内地へ輸送がおこなわれたのは明治24、25年のことであった。その後交通機関の開発により、伐出した木材を海外に輸出するに至る。とくに中国への枕木輸出が多かった。これは南北鉄道敷設事業の勃興による<sup>4)</sup>。

小樽港は北海道木材の輸出において、同道唯一であり、「満韓経営事業」の発展にともない輸出をのばした。日露戦争に際しては、各地での戦勝に市場人氣が復活した。軍用材の買上げや、京釜鉄道・京義鉄道からの注文

- 
- 1) 木材輸出の発展については、萩野敏雄「明治大正期における木材輸出の発展（1）—出超時代形成の起動力—」（『林業経済』296号、1973年）を参照。
  - 2) 日露戦争と木材輸出にかんして、拙稿「日露戦争と長崎における木材業の展開」（『大阪学院大学国際学論集』第21巻第1号、2010年）、拙稿「日露戦争と大阪木材市場」（『大阪学院大学国際学論集』第20巻第2号、2009年）、拙稿「東京における木材取引—明治30年代後半の状況—」（『大阪学院大学国際学論集』第22巻第1号、2011年）で検討した。
  - 3) 能代の状況については、拙稿「能代の木材業と木材輸送」（『大阪学院大学国際学論集』第21巻第2号、2010年）で検討した。
  - 4) この段落については、『東京外十一市場木材商況調査書』（1906年、農商務省山林局。以下『木材商況』と略記する。）pp.13-14

も増加した。このため例年ならば伐木を停止する夏季にも伐採された。日  
本海海戦以降は海上の安全が確保され、中国各地への輸送材も盛況を呈し  
た。明治34年以降の小樽の木材輸出額をみたものが、表1である。韓国へ  
の輸出が激しく増加したのは、京釜鉄道の建設に引続いて京義鉄道その他  
諸工事が日露開戦によって促されたことによる。明治38年度の韓国への木  
材輸出額は、前年度の半分にもみたくない。これは鉄道が竣成したこと等  
による。韓国への輸出増加は、一時的現象であった。これに対して、中国へ  
の輸出増加は、順調に推移してきた<sup>5)</sup>。

内地輸送についてみると、外国輸出の好調さと比較して、需要は一進一  
退である。明治37年には、枕木の取扱いが皆無となっている。北海道産の  
枕木は、ナラ、ヤチダモ等であり、通常小樽では一挺の価格55、56銭で  
あった。さらに「優等」であった青森産のヒバ枕木が同程度の価格であ  
り、需要は奪われた。またこのころから内地の鉄道会社では、雑木類に防  
腐剤を注入使用するようになったことも影響した<sup>6)</sup>。

小樽の木材輸入は、陸運輸入は北海道各地から輸送されたものであり、  
小樽を通過して輸出されるものである。海運輸入は内地からの輸入であ  
り、小樽港やその付近で消費された。その消費量は、通常年6、7万石で  
あった。このように小樽市場は典型的な輸出港であった。外国輸入、内国  
輸入とも、大変少なかった<sup>7)</sup>。

表1 小樽の材料輸出額（単位：円）

	明治34年	明治35年	明治36年	明治37年	明治38年
内 国	286,028	327,402	414,674	256,153	—
中 国	353,124	300,065	474,904	512,674	1,443,356
韓 国	16,508	44,999	78,457	577,622	229,965

出典：『東京外十一市場木材商況調査書』（農商務省山林局、1906年、以下  
『木材商況』と記す）、p.15及びpp.131-132。

5) この段落については、『木材商況』 p.15、pp.131-132

6) この段落については、『木材商況』 p.132

7) この段落については、『木材商況』 pp.132-133

次に輸出入先について、くわしく検討したい。明治34年以降の内地等への輸出について、製品、地域をみたものが、表2である。上述したように、枕木の輸出は苦境を経験している。木材全体でも、輸入は一進一退である。その輸出先は、東京、横浜、大阪、神戸、兵庫、門司等である。明治34年以降の外国輸出について、製品、地域をみたものが、表3である。枕木輸出は中国、韓国に対して、順調に増加しているとみてよい。木材・板等についても、中国、韓国へ輸出されている。なお上海向は角材14尺以上（尺角以上）であり、膠州湾向は角材12尺以上（尺角以上）であり、營口・天津・山海関向は角材8尺3寸以上であった<sup>8)</sup>。明治34年以降の輸入について、製品、地域をみたものが、表4である。木材、枕木とも、北海道内からの受入れが中心である。

つづいて木材の運搬についてみたい。小樽から輸出される木材の運搬方法は、荷主によって異なっていた。輸出を担った中心であった三井物産会社、天塩木材株式会社は、自身の汽船で運搬した。その他の荷主は社外船を用い、臨時運賃を取り決めていた。運賃はおおむね以下であった。外国運賃は、木材100石につき、漢口まで200円、仁川・上海・膠州湾・汰沽まで80-130円であった。内国運賃については、各地への木材種別船賃について、表4（これは日本郵船会社の運賃であり、積入船賃は貨主持、陸揚船賃は船持であった。また社外船の賃金は比較的安価であり、貨物の多寡、入港船の模様等により特別割引等がおこなわれた）のようであった。小樽港への木材陸上輸送において、最もよく利用された炭礦鉄道の運賃をみると、一品積貸切で滝川—伊納間より送出のものは11トンにつき2銭であり、旭川以北より送出のものは11トンにつき1銭8厘であった。手宮停車場から海岸までおよそ5、6丁あり、運賃は貨車1台およそ40石につき1円50銭から2円であった。他に貨車卸賃40銭を要した<sup>9)</sup>。

船賃については、小樽運送船同業組合があり、同業者はかならず加盟の義務があった。明治39年当時、組合員9名、船170隻（内曳ボート12

8) この段落ここまでについては、『木材商況』p.133

9) この段落については、『木材商況』pp.137-139

表 2 小樽の木材輸出と製品・地域

	明治34年				明治35年				明治36年		明治37年		
	木材	木材	枕木	寸甫	木材	木材	板	寸甫	枕木	木材	枕木	木材	
海運輸出	数量	1,767石	155,189石	2,503間	1,750本	119,314丁	1,690石	194,493石	3,010間	1,857本	40,408本	266,176石	170,766石
	価格	2,642円	232,784円	1,377円	2,100円	44,726円	2,535円	291,739円	1,806円	2,228円	16,163円	400,074円	7,179円
仕向先		北海道	釧路・根室・神戸	北海道	北海道	神戸・大阪・門司	北海道	大阪・東京・兵庫	北海道	北海道	大阪・門司	大板・神戸・東京・船支・釧路	東京・横浜・神戸・大阪
陸運輸出	数量	—	1,508石	—	—	91丁	—	8,483石	—	—	137本	4,537石	410本
	価格	—	2,262円	—	—	135円	—	12,725円	—	—	206円	6,806円	615円
仕向先		—	北海道	—	—	北海道	—	北海道	—	—	北海道	北海道	北海道

出典：『木材商況』 pp.134-134。

表 3 小樽の木材輸出（製品別・国別）

	明治34年		明治35年		明治36年		明治37年		明治38年	
	枕木	木材・板他	枕木	木材・板他	枕木	木材・板他	枕木	木材・板他	枕木	木材・板他
数量(石)	120,010	56,847	141,829	27,705	248,247	44,097	332,478	177,198	388,615	339,288
中国	118,810	50,594	124,810	23,272	196,115	36,601	126,342	111,635	349,754	278,216
韓国	1,200	5,685	17,019	4,433	32,272	7,056	206,136	65,563	38,862	61,072
香港	—	—	—	—	19,860	441	—	—	—	—
ロシア	—	—	—	—	—	僅少	—	—	—	—

出典：『木材商況』 pp.135-136。

表 4 小樽の木材輸入と製品・地域

	明治34年				明治35年				明治36年		明治37年		
	木材	木材	寸甫	枕木	木材	木材	板	寸甫	枕木	木材	枕木	木材	
海運輸入	数量	822石	5,750石	49,686間	11,030本	—	922石	11,086石	42,198間	13,314本	—	10,256石	2,510本
	価格	2,877円	8,625円	27,327円	13,236円	—	2,922円	16,632円	25,316円	15,976円	—	15,384円	1,255円
仕向先		東京他	北海道	山形	山形	—	東京他	北海道	山形他	山形他	—	北海道	北海道
陸運輸入	数量	—	308,789円	—	—	149,370本	—	419,582円	—	—	218,114本	682,747石	392,113本
	価格	—	463,184円	—	—	224,055円	—	629,373円	—	—	307,171円	1,024,121円	588,170円
仕向先		—	北海道	—	—	北海道	—	北海道	—	—	北海道	北海道	北海道

出典：『木材商況』 pp.136-137。

隻)を有し、組合規約を設け同業者の秩序確固を期していた。仲仕業者は2名にすぎず、多くは舢舨方と仲仕業とを兼業していた。両者の業務の区分としては、舢舨方は木材を陸上より舢舨船に積み本船に積込上便宜のところにつ着する。仲仕方は舢舨船にある木材を起重機で巻揚げ、一定の位置に積込み整理するとなっていた。その賃金については、角材・板類100石につき舢舨賃、仲仕賃がそれぞれ16円50銭、5円、丸太100石につき舢舨賃、仲仕賃がそれぞれ17円50銭、5円50銭、枕木6尺もの10本につき舢舨賃、仲仕賃がそれぞれ19銭、7銭5厘、枕木8尺もの10本につき舢舨賃、仲仕賃がそれぞれ28銭、10銭となっていた<sup>10)</sup>。

以上みたように、日露戦争前後の小樽では、当該期に発生した中国、韓国の鉄道建設、軍需に対応して、枕木や木材を輸出することで木材業が発展した。木材等は主として北海道各地から鉄道輸送などによって搬入された。輸出は、大部分を担った三井物産会社、天塩木材株式会社は、自身汽船によりおこない、他の業者は社外船を利用した。これら鉄道や社外船、また港湾所業務の利用代金については、標準料金が一応定まっていた。小樽港は木材輸出港であった。

## 2、木材商と同業組合

本章では、小樽の木材業を担った木材商及同業組合についてみたい。重要な業者としては、三井物産合名会社札幌出張所、天塩木材株式会社、札幌に本店があった重谷木材店、渡邊彦太郎、信香製材所、小樽木挽所、その他6、7名の小売商が重要であった。とくに三井、天塩の両会社は、小樽市場の木材界で実権を有しており、取引も広く信用も大であり、外国貿易をほとんど独占していた。重谷がこれに次いでいた<sup>11)</sup>。

三井が木材事業に着手した当時、中国への枕木輸出は「薄資無稽の投機者」により担われることが多かった。このため無謀な競争が惹起され、粗

10) この段落については、『木材商況』 pp.139-140

11) この段落については、『木材商況』 pp.213-214

製濫造がつづいた。信用は失墜していた。三井の参入により資金力のない業者は圧倒され、粗製濫造はあとをたった。枕木の事業は、ほとんど三井の一手販売となった。日本産枕木の信用も、顧客のあいだで回復した<sup>12)</sup>。

明治39年当時の三井の事業の状況をみると、外国輸出に力をいれており、山元からの直接輸送をおこなっていた<sup>13)</sup>。枕木は山元の製造が多かった。三井物産会社札幌出張所全体の取引高は、表5のようであり海外への枕木輸出が重要であったことがしりうる。枕木は、中国向け中心であった。明治35年末からは、空知郡砂川村に木挽工場を設置した。砂川工場は建築材（挽角、板類）を主として製材した。明治36年には砂川工場は、鋸器械7台、120馬力を有し、職工を使役して挽材事業をおこなった。明治36年には針葉樹35,000石、闊葉樹15,000石、明治37年には針葉樹56,000石、闊葉樹24,000石、明治38年には針葉樹84,000石、闊葉樹36,000石を現資材とした。（なお杣角では製材減少分は約35%であった。針葉樹は全て建築用材に用いられ挽角6割、板4割であった。闊葉樹は主として枕木に加工され、2割は板材であった。針葉樹はエゾマツ8割、トドマツ2割であり、闊葉樹はヤチダモ5割、セン2割、ナラ2割、カツラ1割であった。）注文はなお多く、新工場建設中であった。明治39年には角材、板類

表5 小樽からの内国運賃（木材種別、単位円）

	5才以下	15才以下	25才以下	35才以上
東京	88	104	128	160
横浜	84	99	122	152
半田 四日市 門司	93	110	136	170
神戸 尾道	99	116	143	179
大阪	101	121	147	184

出典：『木材商況』 p.138。

12) この段落については、『木材商況』 p.14

13) この段落ここまでについては、『木材商況』 pp.214-215



の需要が急増して、枕木に並ぶに至った<sup>14)</sup>。

天塩木材株式会社は、明治33年小樽港に創立された。元来天塩木材は、もっぱら内地輸送の方針をとっていた。明治37年にいたり、中国、韓国への輸出を試みた。日露戦争のため天津地方の木材が高騰したことを好機ととらえ、天津、上海等に出張所を設けた。三井物産と相対峙しながら、天塩木材は販路の開拓につとめた。明治38年の両者の輸出をみると、三井物産は枕木が29万8,779石、64万922円、木材・板が25万2,404石、65万245円であり、天塩木材は枕木が8万9,836石、18万7,221円、木材・板が7万8,574石、16万1,811円であった<sup>15)</sup>。

天塩木材の資本金は20万円であった。明治38年当時、工場には鋸器械12台が設置され、140馬力を有した。昼夜にわたり、40、50人の職工が使役された。1日300石の資材が鋸断された。販売高は、製材に属するもの14万528円16銭5厘、枕木に属するもの31万1,290円59銭6厘、角材に属するもの33万4,811円92銭5厘、丸太材に属するもの7万3,892円83銭9厘であった。三井にくらべて取引額は小さかったが、確実な営業がなされていた。すなわち、明治38年の決算では、15%の配当がなされた<sup>16)</sup>。

重谷木材商店は、札幌の重谷木挽工場の支店であった。本店工場は、1年間の取引高については、明治36年は16万8,322円、明治37年は21万3,598円、明治38年は36万1,666円であった。80人以上の職工を使役して鋸機械を運転していた。1年当たり、約8万6,000尺メの原料を製材した。用いた樹種は、トドマツ、エゾマツ、セン、カツラ、シロコであり、建築材、板類を生産した。東京、兵庫、大阪等内地輸送専門であった。明治39年当時は直接外国輸出をおこなっていなかったが、三井、天塩両会社に次ぐ力量があった。なお、小樽支店の年間取引高は、約3万6,000円であった<sup>17)</sup>。

渡邊彦太郎は古来より堅実な木材商であった。三井・天塩両会社が設立される以前には、小樽木材業組合長をつとめていた。明治38年当時、年間

14) この段落については、『木材商況』pp.214-216

15) この段落については、『木材商況』p.14

16) この段落については、『木材商況』pp.216-217

17) この段落については、『木材商況』pp.217-218

の取引高は約18万400円であった<sup>18)</sup>。信香製材所については、明治38年当時、年間の取引高は約3万円であった<sup>19)</sup>。小樽木挽所については、明治38年当時、年間の取引高は約2万6,400円であった<sup>20)</sup>。

次に同業組合についてみたい。小樽港では、木材輸送を開始して十数年が経過した明治39年当時においても、木材業者の協力はみられなかった。年々商況は旺盛になったが、組合組織はなかった。規約もなく、各業者の商略に拠っていた。このため競争がおこったこともあり、明治37年以來の海外輸出の増大にもかかわらず木材価格は上昇しなかった。小樽木材業組合が一時組織され20名以上の加盟者があったが、規約等遵守する意向はなかった。競争、抜売等がおこなわれ、瓦解した<sup>21)</sup>。

### 3、木材取引と利益

次に本章では、木材取引や利益についてみたい。

木材取引については、小樽の木材会社、木材商が、山元商人に前金を出資し仕入れた。山元商人は前金を用いて、材種、石数、価格等契約をおこない、御料林、国有林、貸下地（植民地といわれた）内の立木を買受けた。それを付近の土場、停車場等に伐出して、受渡しがなされた。山元商人が自力で払下林等を伐出、流送して、土場で小樽の業者に売渡すこともあった。こうした方法は、秋田、青森地方の慣習と同一のものであった。しかし明治38年当時には、三井・天塩両会社は旧來の取引方法を廃しており、直接山林を買受け、直営事業として伐出するようになっていた。こうした変化がみられた。

小樽市場での売買については、定まった規律はなかった。業者が適宜売買した。三井・天塩両会社は外国輸出につとめ、売買取引は天津、上海等の出張所、その他代理店でおこなわれた。小樽ではその注文をうけ、輸出

---

18) 『木材商況』 p.218

19) 『木材商況』 p.218

20) 『木材商況』 p.218

21) この段落については、『木材商況』 p.16

した。内地輸送でも同様であり、神戸、大阪、東京等の代理店にむけて木材は供給された。このように各地代理店が取引上重要であった。天塩木材会社は、従来から地売もおこなっていた。その他の木材商は、需要地よりの注文売（得意先よりの申込みにもとづき現金、荷為替で取引された）、船手売（回漕問屋の周旋による取引）をおこなった。

代金の授受は、地売については現金売、月末掛売が習慣であった。天塩木材は一切掛売をおこなわず、現金売を励行した。一方各地へ輸送された木材については、現金売、仕切売、委託売の3種方法が用いられたが、委託売は稀であった。なお、委託販売をうけるときは、問屋口銭は3歩ないし5歩であった。また回漕問屋は木材輸出入につき、手数料を荷主からうけとった。輸入の場合運賃の3分であり、輸出の場合5分であった。

この他として、木材置場料が発生した。小樽港は地勢上平地が少なく、火災後の市区改正もあり一層土地が不足していた。「寸尺の地もこれを争うの有様」であり、粗大な木材を置く余地はほとんどなかった。このため「海中に積立つの奇観」を呈していた。少量の木材を置くにもその料金は高価であり、料金も一定せず随時地主との談判により協定されていた。料金の実例としては、7トン積荷車1台の木材置料は1か月1円であり（ただし16日後からの場合は50銭）、1坪につき1か月の料金は30銭から1円であった<sup>22)</sup>。

次に、木材業者の利益についてみたい。例として、三井物産が芦別御料林において直営で伐木運搬事業をおこなう場合の収支についてみる<sup>23)</sup>。

収入としては、木材代金が1万7,815円50銭（これは1万1,877石にたいする砂川平均相場100石につき150円で計算したもの）である。支出としては、創業費が150円（これは、柚頭1名、柚夫2名に払下箇所を10日間探検させる費用、払下出願に要する費用、立木授受立会等に要する費用である）であり、立木代金が2,380円36銭（これは、針葉樹雑木2万3,000尺メ（1尺メが7銭）、闊葉樹雑木451尺メ（1尺メが8銭）、桂類6,119尺メ（1

22) この章ここまでについては、『木材商況』 pp.278-281

23) 『木材商況』 pp.278-280

尺メが12銭)の代金である)であり、帳場費が923円20銭(これは、帳場員2名、物資掛1名、その他物小屋掛費等の合計である)であり、角取費が2,661円40銭(これは、私下総材積2万9,570尺メに対し4分5厘掛、1万3,307石の100石につき20円の割で計算したものである)であり、運材費が7,093円23銭(これは内敷出費79万8,420石の100石につき6円の割で計算したものである)であり、流送費が5,938円50銭(これは流送中川沈み、見落とし、網くり等を約1割減として、1万1,877石の100石につき50円で計算したものである)であり、水揚及積上費が356円31銭(これは砂川土場の水揚積立100石につき3円で計算したものである)であり、欠損費が530円(これは、柚夫の疾病、逃亡、その他の事故により賃金を貸越し、回収の見込みのないもの。ただし角取費の約2割と見込んでいる)であり、傷病手当が50円(これは柚夫が傷病したとき支給されるもの)であり、留網費が216円(これは本網、補助網のマニラロップ1,750斤の運賃、その他の雑費の合計である)であり、資金利子が875円26銭2厘(これは、資金1万4,004円19銭に対するもの。1年間につき15%でその5か月分)である。差引2,936円4銭8厘の利益となる(払受立木2万9,570尺メ、1万1,877石についてである。100石当りの利益は24円72銭である)。

費用については運搬費が大きく、全費用の約半分をしめる。立木代金は、運搬費の約3分の1程度でしかない。

#### 4、輸出と規格化

本章では、木材の造材方法について検討する。輸出をはじめとして、取引のなかった地域への木材の売込に際して生じる問題について検討したい。

小樽木材市場においては、地元向けの小売用木材を例外として、各地の注文に応じて輸送された。造材方法もしたがっておのおのであった。軍用地の注文、木取の都合などにより、適宜の造材がおこなわれた。たとえば木取が意識して注文があった場合、それは奥州地方の木取と同一であり、両端を切放ち小口に少許の面取をおこない長尺に幾分の余裕を付けること

となっていた<sup>24)</sup>。

一方外国向木材については、規格化された造材寸法が要求された。上海向については、角材はかならず尺上にして14尺以上であることとされた。膠州湾向については、角材はかならず尺上にして12尺以上であることとされた。營口、天津、山海関向については、角材はかならず尺上にして8尺3寸以上（これを1連と称した）であることとされた。枕木については、7寸5分・5寸長8尺（広軌枕木の場合9尺）であることとされた<sup>25)</sup>。

このように小樽木材業界においては、輸出が木材の規格化の実現の動因となった可能性が高い。これは木材の寸法は、各地別の基準が習慣として存在したことによるものと思われる。この要求にこたえるため、日本各地に送付される木材については取引する業者の情報がたよりにされた。この場合、個々の事情が考慮されていた可能性が高い。海外へ送付する木材については、規格化によって対応された。

## 5、市場と木材相場

本章では、小樽木材市場における木材相場について検討する。木材は、小樽港に集散する多様な商品の相場のなかでは、比較的高下の変動がないものであった。一時種々の関係から材価格の高低を来たすことはあったが、常にもとの価格水準に復帰した。しかし、明治36年ころから、海外輸出がおおいに増加した。また軍用材等の需要もあり、山元商品が払底した。明治38年後半期より、材価格は高騰にかたむいた。明治39年にはいると、この傾向が持続した上に、各地より建築材の注文が増加した。価格はさらに上騰の気配をしめした。明治39年の小樽市場の木材相場についてみたものが、表6である。

このうち椴角材、天塩松角材、栓角材は、明治36年上半期において、100石につき、それぞれ140円、148円33銭3厘、169円であった。栓角材、椴丸太、白楊丸太、エゾマツ板4分板長6尺、エゾマツ板6分板丈2につ

24) この段落については、『木材商況』p.385

25) この段落については、『木材商況』p.385

表6 小樽の材木相場（明治39年）

百石に付	椴角材	150円	
	天塩松角材	160円	
	栓角材	180円	
	椴丸太	140円	
	白楊丸太	170円	
間に付	エゾマツ板	4分板長6尺	49銭
		6分板丈2	1円50銭
		正8分板丈2	2円30銭
本に付	エゾマツ樺	1寸4分角丈2	10銭5厘
	エゾマツ檜	8分に3寸丈2	9銭5厘
	エゾマツ角	3寸5分丈2	44銭
		4寸丈2	57銭
枚に付	エゾマツ下見板	3分板幅5分丈2	16銭5厘
坪に付	框板原	1寸2分6尺	2円20銭
本に付	框敷居	2寸に4寸丈2	31銭

出典：『木材商況』pp.336-337。

いては、明治38年下半期とくらべて、それぞれ6分増、3分増、6分減、3割3分減、2割増であった。板材については、明治38年ころから本格的に製品として登場したようである。その他の材については、明治39年に初めて値が記録されたものである。全般に板材については、多少大きい価格変動がみとめられる。しかし角材、丸太については、価格変動は軽微にとどまっているともみることができる<sup>26)</sup>。

ところで北海道の山元木材価格として、御料材払下木の1尺メの単価をみると、明治39年当時以下のものであった。すなわち、トドマツは最高42銭・最低15銭、エゾマツは最高42銭・最低15銭、五葉松は最高42銭・最低30銭、ヒバは最高42銭・最低30銭、桂は最高30銭・最低11銭、刺桐は最高30銭・最低11銭、キハダは最高30銭・最低11銭、ナラは最高25銭・最低6銭、ドロは最高30銭・最低8銭、朴は最高20銭・最低8銭、藍地は最高20銭・最低8銭、槐は最高30銭・最低15銭、クルミは最高35銭・最低25銭、

26) この段落については、『木材商況』pp.335-336

シナは最高20銭・最低8銭、雑は最高25銭・最低6銭であった。山元では木材の品質にも相違があったかと思われ、材価は開きが大きい<sup>27)</sup>。小樽市場では、北海道各地から木材を入荷することにより、価格の相対的安定化を実現していたと考えられるものである。なおこれら山元価格に伐木、運搬、造材費等がくわわり、小樽市場での価格となった。伐木、運搬、造材費等は、青森、秋田に比して賃金が高値であったとされている<sup>28)</sup>。

## 結 論

以上みたように、日露戦争期小樽木材業は、中国、韓国へ木材、枕木を輸出することで発展した。輸出は三井物産、天塩木材株式会社が大部分を担い、自身汽船により輸送した。

輸出に際しては、輸出先の事情から木材の規格化が求められた。類似の木材を扱う諸都市にくらべ賃金が高かったこともあり、小樽では動力をもちいた機械製材が発展した。木材業者の組合が存立しにくかったのは、少数の会社が寡占していたことと関係すると思われる。

小樽の木材業者は、需要地の情報については出張所、代理店に依っていた。自身は木材の安定供給に尽力した。取引方法を山元商人に前金を支出しての仕入から、直営で山林で購入する方法へ転換した、また各地から調達することで、木材価格変動を小さくすることに成功した。

---

27) 『木材商況』 pp.337-338

28) 『木材商況』 p.337